

ディケンズの『二都物語』と トロロプの『ラ・ヴァンデ』

Dickens' *A Tale of Two Cities* and Trollope's *La Vendée*

齋藤 九一

Kuichi SARTO

(1) 『ラ・ヴァンデ』と『二都物語』

アントニー・トロロプ (Anthony Trollope) の第3作『ラ・ヴァンデ』 (*La Vendée*) はフランス革命を背景とする歴史小説であり1850年に刊行された。ディケンズの『二都物語』(1859)に先立つこと9年である。トロロプはディケンズとはわずか3歳違いながら作家として認知されるのが遅れ、何かと「先輩作家」ディケンズを気に掛けていた様子が窺えることは以前に拙論でも述べたとおりである。それを考えれば興味深いことに、フランス革命を小説の素材とすることでは、ディケンズはトロロプに先行されていたわけである。

ペンギン・クラシックス旧版『二都物語』の序文でジョージ・ウッドコック (George Woodcock) は、ディケンズが執筆に当たってカーライル、ルソーその他を参考にしたことを述べた後で、“[...] it is unlikely that [Dickens] missed the English novels which had already used the French Revolution as a background, such as *Zanoni*, by his friend Bulwer-Lytton, and Anthony Trollope's *La Vendée*”と言っている (Woodcock 12)。ウッドコックの慎重な言い回しは、要するに、ディケンズがトロロプの『ラ・ヴァンデ』を見落としたとは考えにくいということであり、ディケンズが『ラ・ヴァンデ』を詳しく読んだかどうか、あるいは、どの程度『二都物語』執筆の参考にしたかなどは、にわかに結論が出せないであろう。本論では、そのような執筆過程の問題を検討するのではなく、『ラ・ヴァンデ』という時間的に先行したテキストと『二都物語』とを比べて見て、その間にどのような類似と対比があるかを考察し、それによってこの二つの作品の特徴がより明らかになることを願うものである。例えば、ただ漠然と『二都物語』はフランス革命を

舞台にしていると言うだけではなくて、ディケンズはフランス革命の中のどのような側面に注目し焦点を絞っているのかということを意識するためにも、トロロブの『ラ・ヴァンデ』のような作品を引き合いに出す価値があると考えられる。(以下、本文中の『二都物語』の引用はペンギン・クラシックス旧版、また、『ラ・ヴァンデ』の引用はトロロブ・ソサイティ版による。ちなみに、ペンギン・クラシックス新版『二都物語』のリチャード・マックスウェル (Richard Maxwell) の序文でも、ヴァンデ戦争およびトロロブの『ラ・ヴァンデ』への簡単な言及はある (xiv, xxxi) が、二作品の比較はなされていない。)

ディケンズにおいては、『二都物語』というタイトルどおり、ロンドンとともにパリという都市が主要な舞台である。それに対して、トロロブの作品で描かれるいわゆる「ヴァンデ戦争」の舞台は、ショレ、シュミーエ、ナントなどを含むフランス西部のロワール川の南の地域である。この地で1793年3月から12月にかけて、革命政府に反抗する激しい闘いが繰り広げられ、最終的には革命政府による集団処刑で幕を閉じたのであった。フランス史の概説書は次のようにこの出来事を記述している。「…危機は国内にも生じた。西部のヴァンデ地方で農民の大反乱が起こったのである。都市を拠点にした革命は、ヴァンデの農民にはなんの利益にもならなかったのみか、革命政府は二月末には三十万人の新規徴兵を決めた。徴兵に反発した農民たちは、ついに武装反乱を起こした。反革命派がこの農民一揆を利用しようとしたこともあって、革命政府は農民反乱そのものを反革命とみなし、徹底した弾圧を指令した。実際、派遣された鎮圧軍による弾圧はすさまじかった。1793年末までには沈静化するが、その後もおりにふれて農民はゲリラ戦を展開した。この弾圧の記憶は、その後も長くこの地方に受け継がれていく」(福井憲彦(編)『フランス史』260-261)。

『二都物語』の「都市」に対する『ラ・ヴァンデ』の「地方」、これがまず大きな違いと言えるが、舞台となるのが主として都市か地方かということ以上に、実際の歴史的出来事にどの程度言及するかという点でも違いがある。トロロブの小説が扱っている1793年のヴァンデ地方の事件は、カーライルの歴史書『フランス革命』(1837)でも何カ所か記述されているが、その一つは以下のようである。

Those fanatic Peoples of La Vendée will no longer keep under; their fire of insurrection, heretofore dissipated with difficulty, blazes out anew, after the King's Death, as a wide conflagration; not riot, but civil war. Your Cathelineaus, your Stofflets, Charettes are other men than was thought: behold how their Peasants, in mere russet and hodden, with their rude arms, rude array, with their fanatic Gaelic frenzy and wild-yelling battle-cry of *God and the King*, dash at us like a dark whirlwind; and blow the best-disciplined Nationals we can get into panic and *sauve-qui-peut!* Field after field is theirs; one sees not where it will end. Comman-

dant Santerre may be sent there; but with non-effect; and he might as well have returned and brewed beer.

(*French Revolution*, Bk. III, Ch. IV “Fatherland in Danger”,
Everyman’s Library edition, Part II, 238)

このような史実を踏まえ、カトリノー、ストフレ、シャレットなどヴァンデの実戦に関わった人々からパリに居を構えるロベスピエールに至るまで、多数の実在の人物および出来事を登場させるのがトロロプの『ラ・ヴァンデ』である。それがあまりに多数にわたるために、ロバート・トレイシー (Robert Tracy) は、アーノ・プレス (Arno Press) 版『ラ・ヴァンデ』の序文で、“The novelist’s use of his sources often betrays the beginning writer, afraid that he will omit something important.” (xv-xvi) と言っているほどである。

これと対照的に、ディケンズの『二都物語』で言及される実際の歴史的な出来事は少ないと思われる。ペンギン・クラシックス旧版の序文によれば次のようである。

[. . .] as for the revolution in France, only two actual episodes are taken out of history and re-enacted in the novel, the fall of Bastille and the lynching of ‘old Foulon’, and in both Dickens follows Carlyle very closely. None of the great personalities of the revolution comes on the scene, and only the executioner Samson is mentioned among them.

(Woodcock 15)

たしかに、実際の史実の再現 (re-enactment) という点では、ディケンズは少ないかもしれない。しかし、もちろん史実に注意を払わなかったというのではないことは、ディケンズの『二都物語』の時間の扱い方を見ればわかる。それについては次に述べる。

(2) 1792年8月と1793年10月および12月

物語の時間に関しては、トロロプの方がディケンズよりも単純であり、主としてヴァンデ戦争の一年に満たない短い時間を一直線に描いている。それと比較すれば、ディケンズの方はかなり複雑な時間の扱いである。まず、第1部の6つの章で描かれる、マネット医師をパリからロンドンへ移送するエピソードは、1775年という設定である。次に、第2部の24の章では、時間の進行にいくつか断続がある。冒頭の1章から9章までは1780年で、9章の末尾でチャールズ・ダーネイの叔父の暗殺がある。第10章からはその1年後の1781年となり、ダーネイの叔父を暗殺した犯人の処刑の様子を村の道路工夫がパリのドファルジュ達に語る。その際、1757年の類似の処刑が引き合いに出されてもいる (*A Tale of Two Cities* 200)。

ここでまた時間は少し飛び、第21章ではいよいよ1789年7月に至り、パリのバスティーユ襲撃や地方における民衆の蜂起が描かれる。第2部の最後の第24章はその3年後、1792年である。かつての召使ガベル (Gabelle) の同年6月21日付の手紙を見たダーネイはパリに赴くことになるが、彼がロンドンからパリに移動したのは1792年8月14日であることが明記されている (“Truly, a decree for selling the property of emigrants.” “When passed?” “On the fourteenth.” “The day I left England!” (279)). ダーネイが受け取ったガベルの手紙には亡命貴族財産の没収 (sequestration of emigrant property) への言及があり、ダーネイがパリに渡る8月には亡命貴族財産の売却がある。パリ到着後ダーネイはラ・フォルス監獄に入れられ、9月3日にルーシーと父マネット医師がパリのロリー氏のもとに来る (287-289)。マネット医師の努力にも関わらずダーネイは解放されないまま時が経過する。1793年1月の国王ルイ16世の処刑、および1793年10月の王妃マリー・アントワネットの処刑への言及があって (301-302)、ダーネイ入獄後1年3ヶ月が過ぎた1793年12月頃が、『二都物語』の最終的な局面である (303)。

以上をまとめると、『二都物語』は、1775年、1780年、1781年、1789年7月、1792年8月、9月、1793年1月、10月、12月という時を刻み、それぞれの時点でのエピソードを積み重ねることによって成立していることがわかる。その中でも、ダーネイのロンドンからパリへの移動にともなって、第2部から第3部に移行する1792年8月は緊迫した時間である。このあたりの時間の細かな経過はディケンズにとって重要なポイントであったようで、アンドルー・サンダース (Andrew Sanders) によれば、当初ダーネイは1792年の12月にフランスに渡るようになっていたが、ディケンズは校正の段階で8月に変更したのである。

As the MS changes [. . .] suggest, Dickens clearly revised the time-scheme of this chapter while correcting the proofs of *All the Year Round*. It is likely that he reread the appropriate sections of Carlyle and then determined to move the date of Darnay's visit to France back to the period preceding the momentous attack on the Tuileries in August 1792, the fall of the monarchy and the prison massacres of September. Has Darnay proceeded to France as originally intended in the December of 1792, he might have exercised considerably more caution, given the significant turn of events in the summer and autumn of that year.

(Sanders 126)

この緊迫した1792年8月は、まさに、トロロブの『ラ・ヴァンデ』にとっても重要な日付である。それというのも、『ラ・ヴァンデ』は、1792年8月10日のチュイルリー宮襲撃と国王軟禁という出来事への言及から始まるからである。この事態を受けて、後に内戦の舞台となるヴァンデ地方出身の貴族たち、その中でも

『ラ・ヴァンデ』の主要人物となる3人、すなわち、ド・レスキュール (de Lescure) , ラロッシュジャクラン (トロロブはLarochejaquelin と綴っている) , ドウノー (Denot) が、パリを脱出して地方へ帰ることが述べられている。彼らは(『二都物語』に登場する貴族達とは違って)いわゆる良心的な貴族・地主という立場から、1789年7月に始まった革命に対して強い期待と関心を持っていたのだが、いよいよ暴徒化して王政廃止にまで進んで行く革命の成り行きを見て、王党派としてこれ以上パリに留まることはできなくなったのである。

彼らがパリ脱出の決断に達したのは8月12日と明記されており (*La Vendée* 5) , それは『二都物語』第2部末尾で8月14日にロンドンを離れたダーネイがまさにパリに入る直前である。ディケンズもトロロブもこの1792年8月の歴史的な動きを重視し、ディケンズは3部構成の物語の最終局面の発端に、また、トロロブはそもそも物語全体の始まりに、位置づけている。

それでは、物語の終わりについてはどうだろうか。ダーネイの救出とカートンの自己犠牲を描く『二都物語』の最終局面は1793年12月頃に設定されているが、『ラ・ヴァンデ』の最後から2番目の章である第34章は、1793年10月頃のアンリ・ラロッシュジャクランの結婚を描き、第35章はヴァンデの人々がまだ先行きに希望を持っている微妙な時点で物語を閉じる。その後の史実はヴァンデの壊滅的な敗北であるのは誰でも知っているのだから、いかに小説とはいえ登場人物のその後の幸福を予見する常套的な終わりの言葉は付けられないとトロロブは述べ、ヴァンデの悲惨な結末を詳述せず、時間は1793年から、ワーテルローの闘いの後、イギリス・プロシヤ連合軍がパリに入城する1815年7月7日へ飛び、さらに最後の段落はその35年後、すなわちトロロブがこの物語を書いている1850年となり、「物事を和らげる時間の眺望」(the softening vista of time)によってこの悲惨な物語を締めくくっている (*La Vendée* 406)。

ディケンズの時間操作が、エピソードとエピソードの間に長短様々の時間の飛躍を設定して、第2部では1789年7月のバスティーユ襲撃に向けて時間が重層的に畳み込まれるようにしていることや、また、第3部第10章で、マネット医師が26年前にバスティーユの牢獄内で密かに書いた告発状が提出されて過去の時間が現在に進入する劇的な効果も含めて、様々な工夫が凝らされていることが確認できる。特にトロロブの数ヶ月の時間の直線的な語りと比較すればその印象は強い。上述したようにトロロブも小説の最終章で、1793年10月、1815年7月7日、そして1850年と時間を飛躍させる操作をしているのだが、それはディケンズの場合のように物語の緊張を高めるというよりも、むしろ、あまりにも悲惨な出来事から時間的な距離をおこうとするものである。

(3) 依頼と応答,そして自己犠牲

トロロブの『ラ・ヴァンデ』で描かれる貴族と農民の関係は、王党派という言葉で一括りにしてもよさそうだが、史実を踏まえたトロロブの書き方からすると、革命政府の過酷な徴兵令を嫌う農民の自然発生的な反乱がまずあり、それに対して当然予想される革命政府側からのより過酷な報復措置に対して、農民が戦闘態勢を整えるために、幾らかでも実戦を指揮した経験のある貴族たちに参加を依頼し、貴族がそれに答えるという形で始まったのである。

『ラ・ヴァンデ』第2章は、前章から7ヶ月過ぎた1793年3月、ロワール川南岸の町サン・フロランで起こった1つの徴兵拒否事件を描く。小説では、これがヴァンデ戦争の発端と位置づけられている。前掲のカーライルからの引用にも登場したカトリノーは、この戦争の初期の指導者として歴史上有名であり、その身分は馬車屋あるいは御者 (postilion) であったと言われるが、自ずと反乱軍の指揮官の地位に推挙されたという人物であり、トロロブの小説でも重要人物として登場する。

このカトリノーが貴族に指揮を依頼することを農民に提案し(“There are noble-men and gentlemen, our friends and masters, who will lead you better than I.” *La Vendée* 23), その依頼にラロッシュジャ克蘭などの貴族が答えるのである。これを「依頼と応答」と言い表してみれば、同じ主題は『二都物語』にも見られる。すなわち、ダーネイとガベールの関係である。ダーネイがロンドンでの慎ましい家庭の幸福を犠牲にしてパリに渡るのは、まさにかつて自分に仕えたガベールの依頼に応えたためである。『ラ・ヴァンデ』と同様に、庶民と貴族の間の依頼と応答,そして自己犠牲は、『二都物語』の重要なテーマであると言ってよいだろう。

トロロブが描く貴族達はもちろん王党派に他ならないが、少なくともトロロブの書き方では、貴族達が王党派の野心のために農民を利用したという風にはなっていない。それどころか、特にド・レスキュールは、冷静に勝ち目のないことを知りつつ自己犠牲的に、農民の「依頼」に「応答」して指揮を執っているのである。この点で、若さで颯爽と突っ走るラロッシュジャ克蘭などとは違った性格であることを、まだ若い作家トロロブは描き分けていたことになる。もっとも、ド・レスキュールの「先見の明」の提示方法がいささか性急であるという感は免れない。それというのも、農民たちの「依頼」を快諾したド・レスキュールは、彼の名を冠した第5章「ド・レスキュール」で次のように描かれているからだ。

De Lescure had studied and thought much; he was older than Larochejaquelin, much better educated than Cathelineau. He was as ardent in the cause as they were: why else had he undertaken it? But he understood better than they did the fearful chances which were against them: the odds against which they had to fight, the almost insuperable difficulties in

their way. [. . .] He foresaw also all the horrors into which [the peasantry] were about to plunge; horrors, of which an honourable death on the field of battle would be the least. [. . .] Besides, how could they hope for success against the arms of a whole nation supported by a despotic government? His friends talked sanguinely of aid from England, from Austria, and from Prussia; but he feared that that aid would come too late, after their houses were burnt, and their fields destroyed; after the best among them had fallen; after their children had been murdered; when the country should be depopulated, and nothing but the name of La Vendée left.

(*La Vendée* 53-54)

これはまさにこの後の展開を正確に述べたものであるが、小説のこの段階でのあまりに「正確な予言」は、むしろ若き小説家トロロプの未熟さ・性急さの表れとも言えるだろう。

依頼と応答、その果ての自己犠牲というテーマは、『二都物語』においては、ダーネイばかりでなく、あるいは彼以上に、カートンに関わるものである。そして、おそらく『ラ・ヴァンデ』で、『二都物語』のシドニー・カートンと比較可能な登場人物は、かたき役 (villain) アドルフ・ドゥノーであろう。彼はいわゆる“flawed character” (傷のある性格・登場人物) だが (Tracy xviii), 同じことはカートンにも言える。

『ラ・ヴァンデ』後半で、ヴァンデ軍は革命政府軍に追い立てられて、10月にはロワール川を渡ってブルターニュ地方へ落ち延びる。その頃、「ラ・プティット・ヴァンデ」と名のる軍団が登場し、情け容赦なく革命政府側の兵士を打ち破ってヴァンデ側を助ける。そのリーダーは目深にかぶった帽子と髭で顔を隠した、謎めいた孤独な人物で「マッド・キャプテン」と異名をとるほどに自身に及ぶ危険を顧みない (*La Vendée*, Ch.31)。彼は結局ドゥノーであることが判明するのだが、ここに至るまでの彼の行状は屈折したものである。貴族ではないが階級はジェントルマンに属する孤児ドゥノーは、ラロッシュジャクランと兄弟のようにして育った王党派で、ヴァンデ軍のリーダーである貴族・地主の一員であったが、その生来の狷介な性格から人望を得ず、また、闘いの重要な局面で怯えから金縛りにあって行動できなかったのをド・レスキュールに見とがめられ、さらには、ラロッシュジャクランの妹に求愛して拒絶されたことを逆恨みして、ヴァンデ軍を裏切り、革命政府側についていたのであった。それが死に場所を求めるかのように再びヴァンデ側に立ち返り、最後はラロッシュジャクランと共に奮戦しつつ死に至る (*La Vendée*, Ch.33)。

王党派と革命側との間でのドゥノーの度重なる立場の変更は彼の内面のアイデンティティの揺れの表現であろう。トロロプはド・レスキュールに、“[Denot’s] history gives us a singular insight into the intricacies of a man’s character.” (*La Vendée*

399)と言わせている。「人の性格の複雑さ」の主題は『二都物語』のカートンにもあることは言うまでもない。もっともそれはドゥノーのように政治行動上のアイデンティティの揺れとして表出されるのではなく、マックスウェルの言葉を借りれば、“an inexplicable melancholy” (xxiv) に起因する謎めいたものである。いずれにしても、アイデンティティの問題を最終的に鎮めるものとして、革命の大きな動きの中での自己犠牲的な行為があるという点で、ドゥノーとカートンは共通すると言える。

第33章「アドルフ・ドゥノーの死」に続く第34章は、前述のように最後から2番目という重要な位置にある章で、「ヴァンデの結婚式」と題され、ラロッシュジャクランとド・レスキュールの妹の結婚を描くものである。さらなる自己犠牲的な死という悲劇が前方に待ち受けている状況での結婚式をここに置くことによって、トロロブは物語全体の結末に一種の儀式的 (ritualistic) な雰囲気を与えようとしているものと思われる。この儀式的な雰囲気は、『二都物語』の最後で、自己犠牲的にダーネイの身代わりとなって処刑場に向かうカートンが、死刑囚運搬車の上およびギロチンの下で、一人の若い女裁縫師と寄り添って立っている姿に感じられる儀式性の中に、微かなエコーを響かせていると私は考えている。

(4) ロベスピエールが民衆が

ディケンズもトロロブもいわゆる恐怖政治の下での出来事を描いているのだが、恐怖政治の責任体制の描き方の対比についても一言触れておきたい。

トロロブは『ラ・ヴァンデ』後半第23章と第24章をパリの下宿屋という日常的な空間で冷徹に人心の分析をするロベスピエールの描写にあてている。冒頭の一章を除いてひたすら地方を描いてきた『ラ・ヴァンデ』のテキストに突然といった趣で登場するパリの章は注目に値する。それについて、少し書誌的な事情も考えておきたい。すなわち、トロロブ・ソサイティ (Trollope Society) 版など現行1巻本の第23章は、実は、初版の3巻本『ラ・ヴァンデ』では第3巻第1章にあたるのである。初版を復刻したアーノ・プレス版を見ると明瞭であるが、現行1巻本と比べて、ロベスピエールを取り上げた2つの章は、当然のことながら、非常に目立つ位置にある。クライマックスを描く第3巻の巻頭に「ロベスピエールの性格」、「ロベスピエールの恋」と題する2章があり、それに続く第3章、すなわち1巻本の第25章では、“The commands of Robespierre were being executed; the land was being saturated with the blood of its inhabitants.” (296)と書かれている。すなわち、1793年10月時点のヴァンデ地方の戦争に対して、明確に、ロベスピエールという人物の関わりが述べられている。

それに対して、ディケンズの『二都物語』第3部では、1793年10月から12月に

至る時期を描きながら、ロベスピエール等への言及はない。つまり、トロロブの描き方では、ヴァンデ地方の混乱のさなかにも、パリのロベスピエールを起点とする冷酷な命令系統という一定の秩序があったように見える。それに対して、ディケンズの描く首都パリの混乱した裁判と処刑の有様は、むしろ誰か個人の意志などに容易に還元できない匿名的な無秩序を強調しているように思われる。

この違いは、トロロブは、革命の体制に反抗して立ち上がった（その意味では「反革命派」の）ヴァンデ地方の民衆と貴族にシンパシーを持って『ラ・ヴァンデ』を書いたのに対して、ディケンズは、貴族達の横暴と無策に対して立ち上がりフランス革命を起こした民衆に一定のシンパシーを持ちながらも、革命勃発後の恐怖政治における民衆の残酷さをも『二都物語』に書き込んだ、という事情に起因するのではないだろうか。例えば、ディケンズは「二つ」の牢獄襲撃を描いている。一つは、バスターコ襲撃による囚人の解放（第2部第21章）、もう一つは、革命のさなかでの牢獄への暴力、すなわち、牢獄の（反革命派とされた）囚人への暴力や恣意的な裁判による処刑である（第3部第4章その他）。第1部では抑圧され、第2部では暴力的に蜂起する民衆が、第3部では自ら圧制を行うことになる皮肉さをディケンズは描いており、トロロブと比較して、ディケンズの民衆の扱いには複雑さがある。

(5) まとめと補足

トロロブの『ラ・ヴァンデ』は、史実の流れを追うことにとらわれすぎではないけれども、複数の印象深い虚構の人物を登場させて、小説的な興味を持続させている。また、ディケンズの『二都物語』は、現実の出来事にはあまり触れないで虚構の人物を主としているけれども、フランス革命の経過の中から選び出された時間の断続的なエピソードを効果的に積み上げる点で、決して革命の歴史から遊離しているわけではない。両者ともに革命の転換点としての1792年8月を重視し、また、クライマックスを1793年後半に設定しているという共通性がある。また、「依頼と応答」と呼ぶことが可能な素材を共有しており、フランス革命という一種の極限状態の中での自己犠牲という主題もまた共通のものと言ってよいであろう。

補足的に、その他の類似と対比にも触れておきたい。一つは、トロロブが『ラ・ヴァンデ』を女性の手記（*The Memoirs of the Marquise de La Rochejaquelein*）を下敷きにして書いたことである（Tracy ix）。ディケンズの『二都物語』の背後にウィルキー・コリンズの劇『凍った海』（*The Frozen Deep*）とともにエレン・ターナンが存在がある（Woodcock 9-13）のは周知のことであるから、トロロブとディケンズと、どちらの発想の根源にも女性とテキスト（あるいは女性のテキスト）があ

ったことになる。

次にいささか逆説めくが、「閉所」としての地方と、「避難所」としての都市という対比に触れておきたい。『ラ・ヴァンデ』も『二都物語』もクライマックスの1つとして「境界線（バリア）越え」が設定されている。トロロブにおけるロワール渡河（1793年10月18-19日）と、ディケンズにおけるパリ検問所通過（1793年12月）である。トロロブとディケンズの作品が読者に与える空間および運動の感覚はなかなかアイロニーに富んでいる。それというのも、確かに、トロロブのヴァンデ軍はヴァンデ地方からブルーターニュ地方まで集団的に移動するという点で、大いに運動の感覚をもたらすのに対して、ディケンズのパリは何重にも牢獄的である。だが、牢獄に取り付かれているはずのディケンズの小説で、チャールズ・ダーネイはシドニー・カートンの犠牲的行動によって、牢獄的なパリから避難所としての都市ロンドンへ逃れることができた。それに対して、ヴァンデの人々は、結局（トロロブの第一作でアイルランドを舞台にした小説『バリクローランのマクダーモット家』の主人公サディが短い逃避行の後で刑死するのに似て）出口のない移動を繰り返した後で、全滅に至るのである。その意味で、同じフランス革命、同じ恐怖政治を描きながら、内戦であるが故の悲惨さはトロロブの作品に色濃くあると言ってもよいだろう。

参考文献

- Carlyle, Thomas. *French Revolution*. 1837. London: Dent, 1906.
 Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. 1859. Harmondsworth: Penguin, 1970.
 Horder, Mervyn. Introduction. *La Vendée*. London: The Trollope Society, 1998.
 Maxwell, Richard. Introduction. The Penguin Classics edition of *A Tale of Two Cities*. Harmondsworth: Penguin, 2000.
 Sanders, Andrew. *The Companion to A Tale of Two Cities*. London: Unwin Hyman, 1988.
 Tracy, Robert. Introduction. *La Vendée*. 3 vols. New York: Amo Press, 1981.
 Trollope, Anthony. *La Vendée*. 1850. London: The Trollope Society, 1998.
 Woodcock, George. Introduction. The Penguin Classics edition of *A Tale of Two Cities*. Harmondsworth: Penguin, 1970.
 齋藤九一「トロロブから見たディケンズ」『上越教育大学研究紀要』第19巻第2号, 2000.
 福井憲彦(編)『フランス史』山川出版社, 2001.
 森山軍治郎『ヴァンデ戦争：フランス革命を問い直す』筑摩書房, 1996.